

浜井産業株式会社

ゆるぎない品質の精密機械で
産業の発展に貢献する

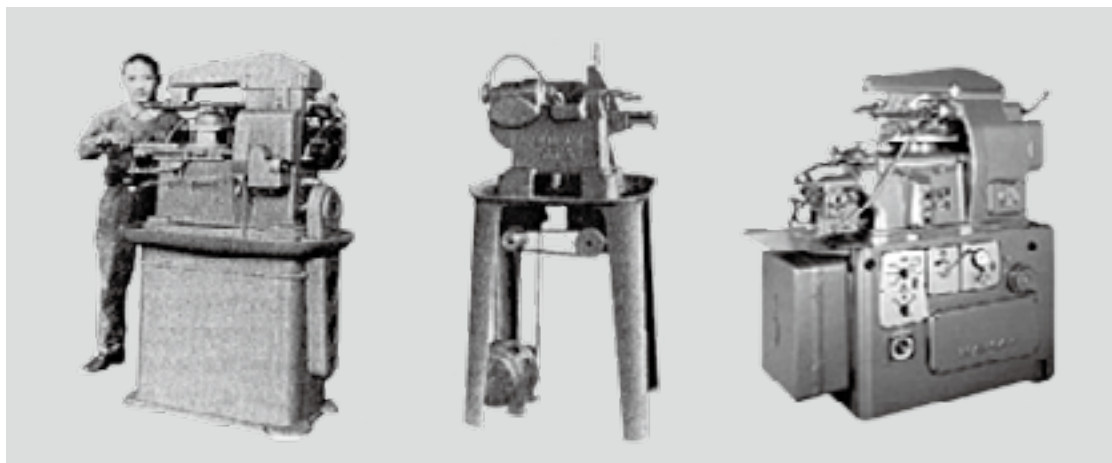


創業者の浜井次朗が、広島県・呉の海軍工場で機械技術を習得し、1921年10月に東京・麻布北新門前町に「浜井工業所」を創業し、酸素熔断機制作を開始したのが当社の始まりです。

1928年には、現在の本社所在地である東京都品川区大崎本町（現・西五反田）に移転し、旋盤や歯切り盤等の工作機械の研究・制作を開始しました。スイス製マイクロン型ホブ盤を国産化するとの思いから研究開発を重ね、1936年には「102型精密ホブ盤」を完成させました。この機種は、その後も改良を続け、「120型」として最近まで生産を継続し、累計7,000台を超えるベストセラーとなり、日本工業大学にある工業技術博物



館にも展示されています。これらの技術は、後の当社の主力機である、全自動型精密ホブ盤「SPシリーズ」やCNC横型ホブ盤「N



創業当初のホブ盤と120A



CNC横型ホブ盤

シリーズ」へと受け継がれています。

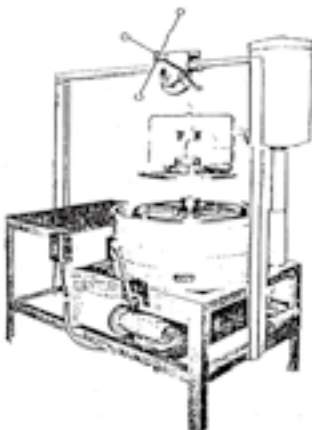
1938年1月には、「浜井機械器具製作所」を設立し、第二次世界大戦を経て、商号を「浜井産業株式会社」に改称しました。その後、1948年12月に企業再建計画が認可され、当社は正式に再スタートを切りました。

また、1953年には、通商産業省（当時）の工作機械試作補助金を活用して、精密平面ラップ盤の国産第1号機を完成させまし

た。現在、当社の主力製品であるラップ盤は、歯車の遊星運動を応用した精密研磨技術を活用し、半導体ウェーハ、水晶振動子、ガラスやサファイア基板などのIT関連部品の平面加工機として、IT業界の発展に貢献しています。

1969年には、栃木県足利市に工場を新設しました。以降、その拡張を続けるとともに、海外企業とも積極的に提携し、タレット旋盤、生産フライス、中ぐりフライス、NCフライス、マシニングセンタ等を生産してきました。現在、この足利工場は、ホブ盤、ラップ盤、両頭フライス盤などを生産する、当社の主力工場となっています。

工作機械業界には、戦前よりその発展に尽力してきましたが、1951年12月21日の日本工作機械工業会の設立時には、当初参加企業41社に加わり、1965年には、日本工作機械第一グループ（JMD）の結成にも参加しました。日工会設立以後は『業界の発展なくして個々の企業の発展なし』の信念の



ラップ盤BTシリーズ



3ウェイラップ盤 16BN



もと、今日まで継続して役員を務め、微力ながらその発展に尽力してきました。

創業者・浜井次朗は職人気質の技術屋で、海外の精密機械などに強い興味を示し、品質の良い機械を作る意識が高かったようです。たびたび、ワイシャツ姿のまま現場に出向き、油まみれになって部品を手に取り、組み立て中の機械を確認していたと聞きます。この姿勢を社員たちが肌で感じ、お互いに品質向上を競い合い、今日まで『ゆるぎない品質の精密機械』を生み出してきた原点となっています。

毎年、期初4月には、足利工場の近くの会場を貸し切って『進発式』を開催しています。これには全従業員が参加し、彼らの慰労を兼ねて、いろいろな催し物や景品の当たる抽選会等を行い、役員・従業員間の親睦を深めています。また、足利工場では、年に一度、「渡良瀬川クリーン運動」に積極的に参加するとともに、工場敷地内でBBQ

大会を開催し、役員たちが従業員とその家族たちに肉を焼いて振舞います。

一昨年、会社設立80周年を迎え、来年の2021年には創業100周年を迎えます。新型コロナウイルス感染症による世の中の大きな変動の中、創業者の精神を受け継ぎ、新しい感性のもと、従業員一体となって、これからも『ゆるぎない品質の精密機械で産業の発展に貢献する』所存です。

今後とも、浜井産業株式会社をよろしくお願い致します。